

はじめに¹

しばしば Sraffa 体系には需要の側面が欠けていると批判がなされることがある。すなわち、人間という主体を排除しようとしている。しかし『商品による商品の生産』(以下『商品』)において、需要が価格形成に重要な役割を果たすと思われる箇所が存在する。ゆえに本稿では彼の客観主義的研究態度を再考しつつ、Sraffa 体系における需要の役割を明らかにしていくこととする。

1. Sraffa's Objectivism

Piero Sraffa(以下 Sraffa)は、当初 Marshall による古典派経済学者解釈——「特に需要サイドの分析が依然として幼稚な段階にある、需給関係を扱う未発達な理論家」(Kurz and Salvadori[2005], p.72)——に同意していた。しかし 1927 年夏に Marx の『剰余価値学説史』を読み、そして Marx 理論の源泉—— Petty², Cantillon, 重農主義者, Smith, Ricardo, Torrens 等——を調査することで、古典派経済学解釈が根本的に転換していった。

彼がまず古典派理論に感銘を受けたのは、社会的剰余生産物を基礎とした厳格な客観主義の観点³による、国民所得の解釈であった。Marshall は商品の「真実の生産費(real cost)」に関して、「それを製造するのに直接間接関与した種々な労働のすべての労苦と、利用した資本を貯蓄するのに要した節欲、あるいはむしろ待忍、これらすべての努力と犠牲とを含めて、その商品の真実の生産費と呼ぼう」(Marshall[1920], p.282, 訳 p.24)と述べている。Sraffa はこの種の費用概念を棄却し、生産は「破壊(destruction)」を含み、商品の実質費用(real cost)は本質的に生産過程で実際に破壊された商品を含むものであると考える。このような観点は、「古典派経済学者によって発展され、彼らは本質的に物的実質費用(physical real cost)の概念を擁護していたと Sraffa は解釈する」(Kurz and Salvadori, *op.cit.*, p.73. 斜体は原文のまま)。社会的な物的剰余生産物の概念に伴う物的実質費用(physical real cost)の概念、生産を循環的なフロー(a circular flow of production)と捉える概念が Sraffa の転換における最重要事項である。

¹ 本稿作成における資料収集あたって、ローマ大学 Cristina Marcuzzo 教授、Nerio Naldi 教授に援助していただいた。

² Sraffa の日記に Petty の名前がはじめて出てくる——同時に Smith や Quesnay, Sismondi 等も登場——のは、1927 年 11 月 27 日である。(Cf. *ibid.*, p.72)

³ 客観主義の立場は Petty 『政治算術』中の一節において、明確に表現されている。「私がこれをなすに当って採用する方法は、いまのところあまり普通ではない。というのは、私は(私が久しくやって見たいと考えていた政治算術の一つの見本として)、単に比較級や最上級の言葉を使いまた理論的な説明をする代わりに、私の言おうとするところを数量(Number)と重量(Weight)と尺度(Measure)とによって表現するという方法によったからである。これは感覚に訴えることのできるだけを用い、また自然の内に実現し得る基礎をもつ原因だけを考える方法であって、特定の人々の変化常なき心や意見や嗜好や感情はこれを顧みず、これを他人の判断に任せて置くという方法である」(Petty[1676], p.244, 訳 pp.64-65. 強調は引用者)。

このような分析手法をとる Sraffa にとって、1927 年以來悩まされ続ける問題があった。価値と分配の理論において固定資本を考察に含めた際、彼の純粋な客観主義的手法⁴とそれら理論との整合性には大きな障害が生じるからである。すなわち資本の循環部分(流動資本)は、ある期間内における生産物に完全に寄与し、その価値が原料物質とともに生産物に移転する。一方、固定資本が寄与した部分は不明瞭で、製品中への原料移転というアイデアはその理論的基礎を失うのである。Sraffa は 1927-8 年当時、資本区分に関して Smith の観点⁵に同意しており、それが自身の定義に一致するものである事⁶を認めている。Kurz and Salvadori[2004]によると、初期 Sraffa が固定資本に関して言及しているのは、もっぱらコーンの種子(seed)のケースであり、その際種子はそれ自身(コーン)の生産に投入される。ここで重要なことは、Sraffa が自身の生産に投入される商品の実物利子を考察の対象から外していることである。それは彼が自身の生産に投入される種子の持ち主が変化しない、つまり循環せず、ゆえに種子を固定資本として扱うべきであると考えているからである。この前提は Smith, Ricardo 等と同様であり、その価値は生産においては発生せず、交換によってのみ発生し、よって種子(固定資本)から剰余を得ることはできないのである。しかし 1928 年初頭もしくは中頃、Sraffa は固定資本に対して利子を支払わないという見解を放棄した。「固定資本に関する前提が根拠のないものであり、固定資本の再生産、結果として社会全体の再生産を損なわせる危険があること」⁷を理解したのである。

ゆえに、主に資本の循環的側面に焦点を当てている Smith の資本区分は、Sraffa にとって有用なものではなくなった。しかしながら Ricardo の観点——もっぱら生産における資本の役割、特に異なる資本財寿命に焦点を当てる——は未だ有用であると Sraffa は考える。本稿では詳述しないが、固定資本のモデル化に際し、Sraffa は幾度か考えを転換⁸をさせる。しかし実質的に彼が採用しているのはこの Ricardo の観点⁹である。この観点を採用し、そして「結合生産物の

⁴ Sraffa の(『商品』における)方法論上の立場について、塩沢([1990], p.83)は「反人間主義(antihumanisme)」と呼んでいる。それは方法論的個人主義でもなく、方法論的全体主義でもない、つまり個か全体かという対立でものを考えない立場である。塩沢はまた Althusser の見解に同意し、人間主義——「人間ひとりひとりが普遍的な本性(人間性)をもち、それが個人の主体的行動として表現される」(ibid., p.84)——の理論的妥当性を批判しており、経済理論における「人間主体追放」の成功者として Sraffa を評価している。菱山([1983], p.15)は Sraffa への追悼文の中で、Keynes の流動性選考説に関して Sraffa が「個々人の主観的評価にもとづいているから、確実な基礎(certain ground)に立つものではない」と評し、論理は「絶対的な厳密さ(absolute precision)」を要請するものでなければならぬと考えていたようだと言っている。

⁵ 「どのような固定資本も流動資本によるほかに収入をうむことはありえない」(Smith[1776], p.283)。つまり原料や賃金基金がなければ収入(価値)は決して生まれない。

⁶ D3/12/10:34 (引用は Kurz, H.D and Salvadori.N[2004], p.4.)

⁷ ibid., p.6. なぜ固定資本に利子が支払われなければならないのかは、該当箇所にて原稿の引用と共に説明されている。(D3/12/6:10, D3/12/11:82a, D3/12/9:11, D3/12/9:87)

⁸ Sraffa の固定資本の扱い方の変遷に焦点を当てた論文として、Kurz, H.D and Salvadori.N[2004]が挙げられる。その中では Sraffa が結合生産での解法を一度は断念したという経緯も述べられている。(Cf. p.33)

⁹ しかしながら、Ricardo の資本区分に関する見解——「これは本質的な区別ではなく、そこに境界線を正確に引くことはできない」(Ricardo[1817], p.31, 訳 p.35)——には同意していない。Sraffa は原稿において「区別は異なるものに基礎を置いているのではない。すなわち二つの目録(catalogues)を作成することは

重要性は羊毛と羊肉ないしは小麦と麦藁といったよく知られた実例にあるよりも、むしろそれが固定資本を主要な種とするような類たる点にある」(Sraffa[1960], p.63, 訳 p.105)と述べるように、結合生産という手法を取り入れることによって、固定資本を含めた社会的再生産の説明に際し、客観主義を守り抜くことに成功したのである。すなわちここで重要なことは、Sraffaが客観主義の維持にとっての理論的障害(固定資本)を克服するにあたって、結合生産体系は必要不可欠な表現技法であり、また Sraffa の客観主義を最も色濃く表した箇所であると言えるのである。

2. Requirements for Use

Sraffa は『商品』の序文における新古典派批判の箇所で、「産出高の変化も、また各種の生産手段が一つの産業によって使用される割合の変化も、考えられていない。だから、収益の変動だとか、その恒常性だとかに関する問題は出てこない」(*ibid.*, p.v, 訳 p.v)と述べている。すなわち『商品』においては収穫一定が前提とされていないのである。この点に関して Asimakopulos [1990]は「様々な需要が価格に対してどう影響するかに関する研究はない。もし各産業において収穫一定の仮定が付け加えられるならば、需要は相対価格に影響を与えないと言うことができる。しかし Sraffa はそのような仮定を置いていない」¹⁰(Asimakopulos[1990], p.332), 「異なる産業における投資は、需要に応じた生産能力によるものであり、生産価格はそのすべての産業における均等利潤率に基づいて決定される」(*ibid.*, p.341. 強調は引用者)と批判し、「完全な経済体系(a complete economic system)——Sraffa の生産体系はその一部である¹¹——における生産価格に、需要が影響を与えるかどうかという問題は保留状態であり、残されているのである」(Asimakopulos[1990], p.332)と述べている。ゆえに我々は『商品』において、この問題に関係すると思われる箇所を探索し、再考しなければならない。

第7節「述語上の注釈」は、Sraffa が生産条件を満足させる交換比率を「生産費」ではなく、「価値」あるいは「価格」と表現したことへの説明が述べられている。そこで「生産費」という表現は非基礎財に関しては適切であるが、基礎財に関しては不適切であると述べている。なぜならば、その交換比率が「それが他の基礎的商品の生産にはたした利用度に依存すると同様に、その生産物じしんの生産に他の基礎的商品がはいりこむ程度にも依存する」(Sraffa, *op.cit.*, pp. 8-9, 訳 p.13)からであり、換言すると、生産物の価格が生産手段に依存し、生産手段の価格も生

できない、すなわち一方は固定的に投入されるもの、もう一方は循環として投入されるものである。」(D3/12/4:11), 「その区別は、生産期間の長さに関する古典派の概念で決められる。」(D3/12/7:27)と述べている。(Cf. Kurz and Salvadori[2004], p.7)

¹⁰ この点に関して Asimakopulos は 1971 年に Sraffa へ手紙を出しており、1971 年 7 月 11 日に Sraffa が返信している。Cf. *ibid.*, p.341.

¹¹ 「我々には均衡体系の半分のみが与えられている。…筆者は、有用な臨時的仮定として、収穫不変の支配を提案している。私としては、これはかえっていつそう幻惑させるにすぎないように思う。賃金の分け前の変化は産出物の構成に影響しない、と仮定するほうが良いように思われる」(Robinson[1965], p.9, 訳 p.121)。

産物の価格に依存するといった相互依存関係が存在するためである。そしてこの引用後に、『商品』において唯一「需要」という言葉が出てくる。『それは供給側にも需要側にも同様に依存する』と言いたくなるかもしれないけれども、そういうのは誤りであろう」(Sraffa, *op.cit.*, p.9, 訳 p.13)。なぜここで唯一「需要」という言葉を出したのだろうか。それは明確に Marshall を意識しているからであろうと推測される¹²。すなわち、需要量と供給量によって説明される限界生産力説という先入観から読者を脱却させるため、Marshall が使用している「生産費」¹³や「需要」¹⁴という言葉の使用をあえて避けることを表明しているのである。

第 44 節「独立変数としての賃金ないしは利潤率」では、所与の独立変数を利潤率とする理由が述べられている。古典派体系は賃金率を外生的に与えられる変数として体系を考えているが、Sraffa はこれを逆転させる。なぜならば古典派経済学者が生存費賃金と考えたものが、剰余の分配を含むかもしれないからである。すなわち実質賃金を価格や利潤率から独立し、生理的・社会的な条件によって決定される、特定の必需品とは見なすことができないと考えているのである。「もし労働者が剰余の一部を得たならば、社会的条件によって決定される量以上の物を消費する可能性が排除できず、さらにまた、消費選択が相対価格や所得分配に依存している可能性を排除できない」(Salvadori[1995], p.156. 強調は引用者)。ゆえに古典派の分析において労働者の消費と同値である実質賃金は体系外から与えられるが、Sraffa においては貨幣利率の水準によって決定される利潤率が体系を閉じる役割を果たすのである。賃金を先決変数とした場合に関して白杉[2005]は、「ニューメレールが異なるごとに、同じ実質賃金率であっても、その経済的意味は異なり、当然対応する利潤率も異なってくるということであろう」(p.32)と、Sraffa の外生変数に関する逆転を好意的に捉えている。

第 50 節は初めて結合生産が登場する節である。結合生産を考慮した場合、極端に言って一つの部門ですべての財を生産することも可能であるが、Sraffa によると「二商品を異なった方法」で「異なった割合で生産する第二の平行的な過程の存在する余地が生まれ」、「生産物の割合が異なっている場合に、一般に二つの異なった方法が同等の有利さをもつような二組の価格を見出すことができる」。ゆえに「より一般的に言って、体系内の独立的な過程の数が商品の数に等しいものとすれば、同じ結果を達成することができたであろう」(Sraffa, *op.cit.*, pp.43-44, 訳 p p.71-73)と述べる。そして第二の平行的な過程はより一般的な「過程数と商品数の一致」という仮定に置き換えられなければならないと主張する。つまり部門数と財の数が一致しなければならないという仮定を置くことで上記の問題を解決しようとするのである。そして本稿の文脈に関して重要な点が第 50 節の脚注で述べられている。「二商品がいずれか一つの方法で生産される割合というものは、一般に、それらを利用するに当たって必要とされる (required for use) 割合と異なっているということを考慮したばあい、二商品を異なった割合で生産する二つの方

¹² 現に Marshall が引き合いに出されている。

¹³ 古典派も生産費という言葉を使っていることから、対 Marshall を想定していたことがここでも分かる。

¹⁴ ここでいう需要とは、普遍的行動性質を保持する主体の行動によるものである。

法の存在することが、二つの方法を適当に組み合わせることによって、二商品を所望の割合で手に入れるために、必要となるであろう」(Sraffa, *op.cit.*, p.43, 訳 p.73. 強調は引用者による)。これは体系を閉じるために第二の過程の存在を仮定した箇所における脚注である。

ここで二つの問題点が生じる。第一に、なぜ「過程数と商品数の一致」を仮定として置かなければならないのか?仮に一致するとしても¹⁵、多数の技術集合から何らかの選択が行われる結果でなければならないのではないのか?つまり『商品』では結合生産において技術がどのように選択されるかが、考察の対象からはずされているのである。第二に、上記脚注部分ならびに第53節での「二つの異なった方法の各々によって、二つの生産物が結合的に生産されているという場合をとろう。いずれかの方法が用いられる程度を変えることができるために、二つの財貨が全体として生産される割合には、ある一定の変動の領域というものが保障される」(Sraffa, *op.cit.*, p.47, 訳 p.77. 強調は引用者)の箇所のように、これらの割合は、言い換えると産出水準はどのように決定されるのだろうか?

Sraffaはこの難問に気づいてはいたが、総産出量を所与とすることでこの問題——本節冒頭で引用した序文にて自らが述べている——を扱うことを避けているのである。しかし上記のように「requirements for use」、すなわち「需要」を考察に含めると産出量所与の仮定、言い換えれば収穫一定の仮定が成り立たなくなってしまうのである。そして「需要」を考察に含めるということは、先の Asimakopulos の問題——需要が生産価格に影響を与えるかどうか——を考察しなければならないのである。

第88節『『外延的』ならびに『内包的』収穫逓減に対する地代の関係』は、Sraffaが唯一産出量所与を仮定していない節であり、第86節の結果—— n 個の異質な土地における n 個の異なる生産方法の場合での地代——と外延的収穫逓減の関係、そして第87節の結果——単一品質の土地における二つの異なる生産方法の場合での地代——と内包的収穫逓減の関係に関して言及している箇所である。そして前者の関係は明白であるが、後者の関係は不明瞭であると述べている。Sraffaによるとこの後者の二方法の並存状態を、土地における生産の漸進的増大の経路における一局面とみなすことができる。そして「生産の増大は、より高い単位費用でいっそう多くの穀物を生産する方法が、より少量の生産を行う方法を犠牲にして、徐々に拡大してゆくことによって生じる。前者の方法が全領域に広がるや否や、地代が騰貴して、なおいっそう多くの穀物を生産する第三の方法が、たったいま取って替わられた方法に代わって、導入されるような点に達するのである。…このようにして、生産方法は突発的に変化するけれども、産出高は持続的に増加しうるのである。／かくて土地の希少性は、地代の発生する背景を提供するとはいえ、生産過程のうちに見出されるべきこの希少性の唯一の証拠は、方法の二重性である」(Sraffa, *op.cit.*, p.76, 訳 p.126 /は段落)と、生産量増加の論拠を方法の二重性、すなわち

¹⁵ Salvadori[1995],[2000]には、一致せずとも「requirements for use」を満足させる生産方法の数値例が提示されている。Schefold[1988]は結合生産体系で支配的な技術が選択された場合、正方体系になることを証明している。

技術の差異に求めている。しかし技術進歩が産出量を増大はさせるが、産出量が変化した結果何が生じるかについては考察していない。産出量が変化¹⁶すると、当然価格が変化する。ましてこのような希少資源が存在する場合にはなおさらである。すなわち何が総産出量を決定しようとも、需要が価格を決定する際に重要な役割を果たすのである。消費者によって需要される総商品量は総産出量の決定要素に含まれる。そして需要される総商品量は、第44節の箇所でも考察したように、価格と分配にやはり依存しているのである。

終わりに

上述のように、需要は『商品』の中においても重要な役割を果たしている事が分かった¹⁷が、なぜ Sraffa は需要という言葉を使わなかったのだろうか。初期 Sraffa([1925], [1926])においては、需要ならびに限界効用という言葉が頻繁に登場している。例えば効用逓減に関して、「一般的な性格をあたえるものは、仮説的なる物理的・心理的法則なくして、各種の欲望を満足させるために、ある財貨の各種の投下分を使用する可能性と、もっとも緊急の欲望を満足させるために最初の投下分を使用する意志と、である」(Sraffa[1925], p.295, 訳 p.33)と述べている。

しかし『商品』においては、需要を意図的に考察の対象からはずしていると考えられる。それはなぜであろうか？ヒントは先の Asimakopulos の手紙——収穫一定を仮定しなければ、需要が価格に与える影響を排除できない——への返答に隠されていると思われる。その中で、Sraffa は「需要」を「効用(Utility)」という言葉に置き換えて話を進め、そして効用は「原料何トン」や「労働時間」に比べ「はかない性質(evanescent nature)」であると述べている。ゆえに需要やその価格への影響を捉えるにあたって、効用というツールを用いることを現象の観察者(Sraffa)にためらわせたのである。実際初期においても、このような彼の研究態度はいくらか見られる¹⁸。すなわちすべてを数量(Number)と重量(Weight)と尺度(Measure)で表現するという彼の客観主義に反するため、効用というツールを用いることはできない、よって彼の中ではそれとほぼ同義とみなしていた需要という言葉は排除せざるを得なかったのである。このように彼を解釈したならば、第44節において利潤率を外生化した理由をさらに深く理解することができる。つまり、より観察可能な対象であったからである。

※ ページの都合上、参考文献表は当日に配布

¹⁶ Steedman[1980]は、技術の切り換えの場合にも必ず産出量変化が生じると述べ、単純な2財モデルで証明している。

¹⁷ 需要が生産価格に影響を与えるかどうかという問題は、吉井[2006]で詳述している。その中で、需要が結合生産体系における技術選択において重要な役割を果たすことを、Salvadori[1985]のモデルを援用することで説明した。そしてさらに産出物の構成要素が変化する可能性についても述べている。その際、主体の行動原理を新古典派需要理論——主体の同質性、完全予見による合理的な最大化行動——に求めることは出来ないので、Multiple-Self(多次元的な自我)を導入した。結果として、より古典派理論に近い概念構成となっている。

¹⁸ 「とりわけ、基本的なる分類は、いろいろの産業に固有の客観的な事情によってつくられるのか、あるいはむしろ、観察者がとる観点到に左右されるものではあるまいか」(Sraffa[1925], p278, 訳 p3. 強調は原文のまま)。